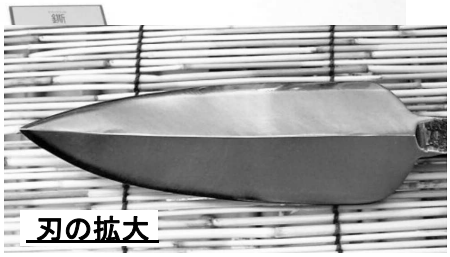
事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

“韓国中部地域原三国時代の鉄器生産” にて

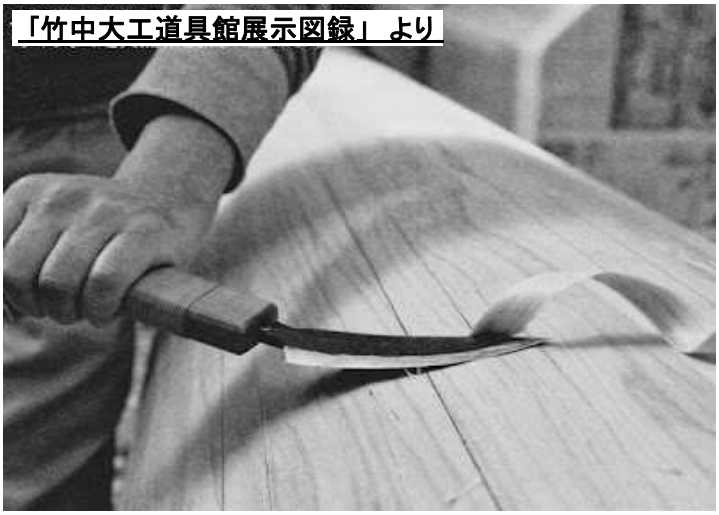
金武重 先生は第8期に続いて二度目の登壇になります。日韓の鉄器遺物の比較を通して研究されていますが、今回取り上げられた日本の遺跡は、①小松市八日市地方遺跡、②倉吉市中尾遺跡、③淡路市五斗長垣内遺跡です。地方遺跡については、16期の下濱先生が講義をしてくれました。また五斗長垣内遺跡は、20期の禰宜田先生の講義に登場しました。そして中尾遺跡については、21期柴田先生の講義の前に鉄矛出土直後の速報として藤田塾長が説明してくれました。やよい塾で耳にしたこれらの遺跡が、海外からも注目される遺跡であることを再認識できました。

最初のお話しは鉋(ヤリガンナ)です。槍鉋とも書きますが、今の平鉋(台鉋)と同じように木の表面を削ってなめらかにする道具です。平鉋が日本に伝わったのは室町時代中期で江戸時代に普及するとヤリガンナは忘れ去られてしまいました。法隆寺の昭和の大修理の際に、解体された古材にあった多数の加工痕から宮大工の棟梁が復元したのが右上の写真です。左の竹中大工道具館展示図録の写真のように丸太の表面を仕上げるときに使われ、笹の葉のような削り痕が残ります。古代建築の表面が夕日があたると波のようにやわらかく見えるのはこのためと言われます。

「法隆寺iセンター展示のやりがんな」



刃の拡大



「竹中大工道具館展示図録」より

鎌倉時代後期に書かれた『春日権現験記絵』にも建築現場で宮大工たちが、1mほどの柄が付いたヤリガンナを使っている様子が描かれています。上の刃の部分の拡大写真には中央の稜線があり、大工道具としてのヤリガンナの最終形はこのような形だったと思われます。地方遺跡で出土したヤリガンナの説明図を見ると、柄が短いことや、稜線のない平坦な形状だったことから木工製品の製作に使われた工具ではないでしょうか。

地方遺跡の出土品は小松市教育委員会による科学的年代測定で紀元前250年前後にあたるそうですが、韓国で出土するヤリガンナは古くても紀元前2世紀くらいです。また最終形のような稜線があることから、地方遺跡のヤリガンナから最終形へと変化した可能性もありそうです。ただ当時の技術の伝播方向(大陸・半島から列島へ)とは逆となるため、地方遺跡のヤリガンナは一般的なものとは系譜が異なっているのかも知れません。でも、尚更希少価値は高まると言えるでしょう。

中尾遺跡の鉄矛についても特異性が高いようです。韓国で出土する鉄矛はほとんど墓壙からのものです。つまり、鉄矛は副葬品として意図的に埋葬されたものです。ところが中尾遺跡では、焼失住居跡から地面に突き立てられた状態で出土しています。考古学者は儀礼の歴史に新たなページが加わったと評価しているようですが、竪穴建物の全焼は偶然の不運でしょうか、それとも儀礼の一部なのでしょうか。前者と考えた場合は貴重な鉄器はなぜ回収されなかったのでしょうか。後者の場合、そしてその儀礼が当時の普遍的な儀礼ならば、青谷や妻木晩田のような沿岸部で、鉄の流通が盛んな集落でも似たような痕跡が残るのではないでしょうか。たとえば他部族からの侵略を受けて火矢を射かけられ、燃え上がる竪穴建物の炎の中に鉄矛があることを知る人たちが、みな逃げたか死んでしまった可能性はないのでしょうか。中尾遺跡の鉄矛も韓国で出土しているものより時代が古いそうですが、歴史のバラエティの豊富さを物語る一例かも知れません。

当時の韓国でも鉄製品の再利用は盛んだったようです。鎌にしろ、刀子にしろ、局部的に破損して本来の用途に使えなくなったとしても、別用途の素材としては見れば、貴重な金属素材に違いありません。現代に出土することがないほど“チビッて擦り切れるまで利用し尽くしたヤマトの人たち” ほどではなくても、古代人は生まれながらの再生社会の人たちなのでしょう。

ところで昨年末の講座では、2003年に飛び出した「弥生時代の実年代が従来より500年ほどさかのぼる」ことが認められるとのお話しでした。今回のヤリガンナや鉄矛が、韓国で出土しているものより古いことが検討課題であるとのお話を聞いて、歴博の発表が出た当時に指摘された問題を思い出しました。それは従来の年代観で対応が取れていた海外の歴史が、新しい年代観と整合性が取れるのかどうかです。また逆説的に考えると、なぜ従来の(正しくなかった?)年代観に対して考古学者は疑問を持たなかったのでしょうか。第23期では、「考古学入門講座」として時代をおって基本的な歴史の流れをたどるそうです。友人は自分の不勉強を棚にあげて、これらの解説が聴けるのではないかと期待を大きくしています。

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書でお願いします)